北上市地域の戦没者と戦争記念碑について

小田嶋恭二

1　はじめに

北上市では、終戦五〇周年記念事業として北上市遺族会に委託し、『北上市戦没者及び遺族名簿』を平成七年度に作成した。この名簿は、市内の遺族会一一支部を通じて西南戦争から日清・日露戦争、満州・日華事変そして太平洋戦争までの戦没者名、戦没年月日、戦没地、戦没年齢、階級、遺族氏名などを調査しまとめたものである。全部で一九三九人の戦没者名が記載されているが、二ヵ村に跨って重複し記載されている者や忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑などに記されているが、名簿から漏れている者などあり、これらを補足し集計した戦没者数は一九二〇人である。『北上市戦没者及び遺族名簿』と忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑などの戦争記念碑を参考資料として、北上市地域の戦没者の戦没年代、戦没地、戦没年齢などの概要と戦争記念碑について、その傾向や特徴について報告する。

2　北上市地域の戦没者の概要について

『北上市戦没者及び遺族名簿』には、かつての一町一一村の戦没者名が西南戦争から太平洋戦争まで記載されている。これらの戦没者名簿と忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑に刻まれている名前とを一部照合してみたが、かならずしも一致するものではなかった。『北上市戦没者及び遺族名簿』には記載されていても、忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑などに記載されていないこともあり、その逆の場合もあった。また戦後、遺族の住所の移動などにより二カ村に跨って重複し記載されている例も見受けられた。このような点から氏名、戦没年月日、戦没場所、遺族者名が同一である戦没者については重複しているものとみなし除外した。戦後、行政区域の変更が一部なされている地域もあるが、およそ旧村単位の戦没者数は表1のとおりである。

戦争別の戦没者数、戦没地、年齢、階級などについてみると、昭和一一年から二〇年までの戦没者が一六二六人で全戦没者数の八四・五％にも達する。このうち、昭和一七年から二〇年までの戦没者数は一四八六人で七七・四％を占める。西南戦争から太平洋戦争までの戦争・戦役において、いかに太平洋戦争での戦没者数が多かったかが歴然としている。その理由としてアメリカの参戦で、飛行機、戦車、重火器が本格的に導入され、機動力、破壊力が飛躍的に増大し総力戦、消耗戦となって犠牲者が増大していったことがうかがわれる。

表1　旧村の人口と戦没者数

旧村	地区名	昭和15年の人口	昭和20年の人口	戦没者数
旧北上市	黒沢尻町	13,432	16,830	484
〃	鬼柳村	2,378	3,013	83
〃	飯豊村	4,039	4,892	129
〃	二子村	3,118	3,592	106
〃	更木村	2,149	2,599	83
〃	口内村	3,151	3,659	103
〃	稲瀬村	5,204	6,254	37
〃	相去村	3,693	4,966	97
旧和賀町	岩崎村	6,932	8,742	225
〃	横川目村	4,231	5,483	191
〃	藤根村	3,266	3,968	139
旧江釣子村	江釣子村	6,233	7,345	243
	合計	57,826	71,343	1,920

(1) 戦没者数

一九二〇人の戦没者のうち、陸軍一五〇七人（七八・五％）、海軍三二八人（一七・一％）、満蒙開拓義勇軍九人（〇・四％）、所属不明や徴用工員など七六人（四・〇％）である。戦没年代別では、西南戦争で四人（〇・二％）、日清戦争で二四人（一・二％）、日露戦争で八五人（四・四％）、満州・日華事変で一四八人（七・七％）、太平洋戦争で一六二七人（八四・七％）亡くなっている（図1）。これに八甲田山雪中行軍（三人）と大正三～八年の戦没者数（八人）を加えると戦没年代が明らかな者は一八九九人である。特に太平洋戦争での戦没者が突出しており昭和一九、二〇年の二ヵ年だけで一三〇〇人となり全体の戦没者の六七・七％を占める（図2）。

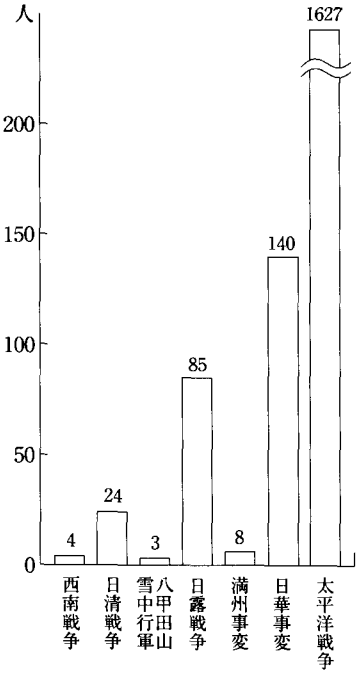
(2) 戦没地

日清戦争おいては、台湾と広島陸軍病院での戦没者が多い。日露戦争は、中国の盛京省黒溝台、奉天省の戦没者が圧倒的に多い。満州・日華事変では戦没者が中国全土に拡大するが、なかでも北支の山西省、満州が多い。太平洋戦争では、戦場が中国大陸から東南アジア、南洋諸島アジア各地に広がっている。特にフィリピン、ニューギニア、ガダルカナル、マリアナ諸島などの戦没者が圧倒的に多くなる。昭和一九、二〇年の戦争末期には玉砕とか全滅という言葉が示すとおり、一日で三〇～四〇人単位で戦死しているところもある。終戦から昭和二三年頃までは、シベリヤ抑留における戦没者が多くみられる。

陸軍では、中国大陸、フィリピン諸島、ニューギニアの順に戦没者が多く、この三地区で約五二％を占める。中国大陸では満州と山西省、フィリピン諸島ではルソン島とレイテ島、ニューギニアではビアク島が圧倒的に多い。海軍では、フィリピン諸島がやはり多く、次に南洋海域のソロモン、マーシャル、マリアナ諸島である。満蒙開拓義勇軍では九人全員が満州で昭和一六年から二〇年までの戦没者である。

(3) 年齢と階級

日露戦争での戦没者が二一歳から三八歳までの青年及び壮年層に集中しているのに対し、太平洋戦争では一五歳から五三歳までの少年から老年層まで広がっている。その中で三〇歳未満の二二～二六歳代の若年層の戦没者が多い。最年少の戦没者は、太平洋戦争で昭和一九年六月二子村の川辺荘六という一五歳の少年である。所属は海軍であるが、詳細については不明でフィリピンで亡くなっている。最年長の戦没者は、やはり太平洋戦争で昭和二〇年五月と昭和二三年九月に亡くなっている二人で五三歳の老年兵である。所属は陸軍と海軍であるが、階級は不明である。一五歳から一九歳のまでの戦没者数は五三人で、うち海軍三〇名、陸軍八人、満蒙開拓義勇軍七人、その他七人となっている。また四〇歳から四九歳までの戦没者数は三五人、五〇歳以上の戦没者数は四人となっている。



※不明者 21 人と 1914 ～1919 年での 8 人を除く

図 1　戦争別戦没者数

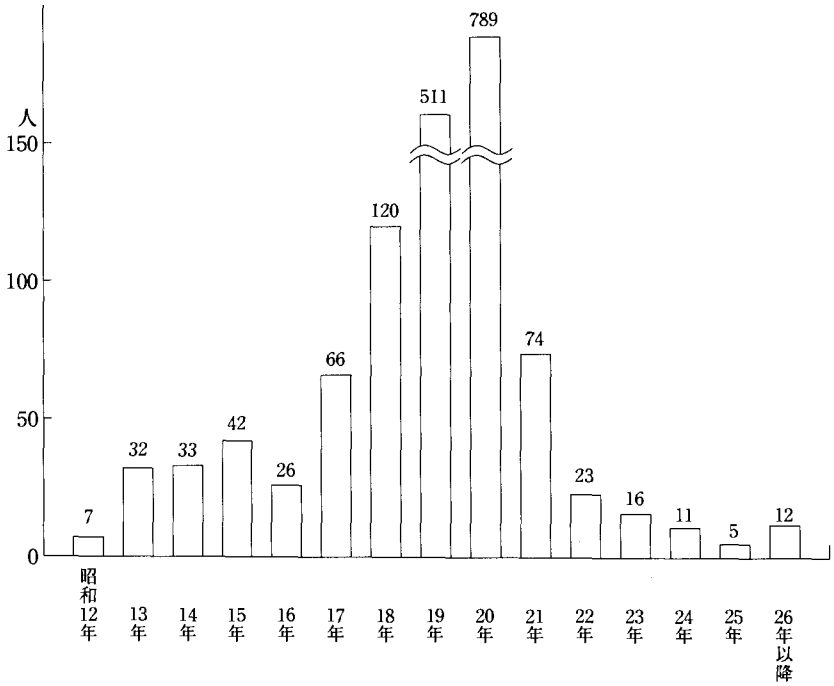


図 2　昭和 12 年以降の戦没者数

陸軍の上位階級戦没者では、太平洋戦争で中佐二人、少佐二人が昭和一九～二〇年にかけて亡くなっている。海軍の上位階級戦没者では、将校一人、大尉三人、中尉九人、少尉一三人が昭和一七～二〇年にかけて亡くなっている。

3　北上市地域の戦争記念碑について

北上市地域の戦争記念碑は、これまでに確認されているものだけで三九基ある。その内訳は忠魂碑一三基、慰霊碑七基、頌徳碑八基、招魂碑三基、忠霊塔二基、その他記念碑六基である。

造立年代の古い順にみると、招魂碑は明治一八年から明治三四年まで、忠魂碑は明治三八年から大正一〇年まで、忠霊塔は昭和一八年、慰霊碑は昭和二六年から昭和五一年まで、頌徳碑は明治三六年から昭和五六年までの造立である。その他記念碑は、征清紀念、日露戦役紀念と八甲田山雪中行軍の碑で明治二九年から明治四二年までの造立である。三九基の戦争記念碑のうち、日露戦争に関する碑が一三基あり全体の三分の一を占めている。

(1) 和賀町横川目の「忠霊塔」について

北上市和賀町横川目笠松の八幡宮境内に昭和一八年に造立された忠霊塔がある。この忠霊塔は、高さが台座まで含めて六・〇m、横が六・六mで、正面台座の中は納骨堂になっている。台座の左右には銅板プレートがはめ込まれ、一七七人の戦没者名が階級順に記されている。台座の裏には寄付者名、造立者、建立年月が列記されている。銘文は縦書きで「忠霊塔」とあり、裏は「陸軍大臣東條英機謹書」とある。昭和一八年五月横川目村長小原末松の建立になっている。納骨堂の中には、現在一八九柱が祀られているが、名札や石ころが入っているものもある。

戦没者名が記されている台座の左右の銅板プレートには、戦争別に所属、階級、氏名しか記載されていない。階級別に陸軍一三五人、海軍四二人の名前がある。陸軍では少佐を筆頭に一等兵まで一三一人と軍属四人、海軍では少尉を筆頭に二等水兵まで三四人と軍属八人である。「北上市戦没者及び遺族名簿―終戦五〇周年記念―」（平成七年一一月発行）に記載されている名簿（一九一人分）と照合すると一四人少ない。一七七人を死没者年代別にみると次のとおりである。

明治一〇年　一人　西南の役
明治三七～四〇年　一五人　日露戦争
昭和一二～一五年　一二人　日華事変
昭和一六年　三人　太平洋戦争
昭和一七年　八人　〃
昭和一八年　一一人　〃
昭和一九年　四五人　〃
昭和二〇年　六七人　〃
昭和二一～二三年　九人　戦後
不明　六人
計　一七七人

昭和一九～二〇年の戦没者が圧倒的に多く、その戦没地は、フィリピン、ニューギニア、中国山西省などである。

忠霊塔のすぐ側に「五訓之森」の石碑があり、裏には「昭和十八年七月八日　帝国在郷軍人会横川目村分会建立」と記されている。

(2) 和賀町藤根の「忠魂碑」と「慰霊碑」について

北上市和賀町藤根稲葉の稲葉神社境内に忠魂碑と慰霊碑がある。忠魂碑は、高さ二・九m、横一・〇mの大きさで、縦書きで大きく「忠魂碑」とあり、左端に「陸軍大将伯爵寺内正毅書」とある。裏は菊池卯之松ほか五人の氏名、所属、階級、戦没年、戦没地が列記され、最後に大正元年十一月廿日とあり、造立者名はない。戦没者六人全員が陸軍で輜重輸卒三人、一等兵三人である。戦没年代は、明治二八年二人（日清戦争）、明治三七～三八年四名（日露戦争）で、戦没地は清国盛京省四名、台湾一名、広島予備病院一名である。

慰霊碑は、高さ二・四m、横一・〇mの大きさで、横書きで大きく「慰霊碑」とあり、その下に縦書きで五段にわたって一二九人の所属、階級、戦没者名が記されている。その後に発起人の名前がある。高橋万三ほか三人で、建立年月日は昭和四十五年十二月と記されている。裏に刻字はない。隣の忠魂碑戦没者六人と合わせると一三五人になる。一二九人の内、陸軍が一一二人、海軍が一七人である。陸軍では少佐から一等兵まで一一〇人と軍属二人、海軍では少尉から二等兵まで一四人と軍属三人である。一二九人を死没者年代別にみると次のとおりである。

昭和一二～一五年　四人　日華事変
昭和一六年　一人　太平洋戦争
昭和一七年　七人　〃
昭和一八年　五人　〃
昭和一九年　三八人　〃
昭和二〇年　五八人　〃
昭和二一～二八年　一一人　戦後
不明　五人
計　一二九人

やはり昭和一九～二〇年の戦没者が圧倒的に多く、その戦没地はフィリピンのルソン島、レイテ島、ニューギニアのビアク島、中国の山西省などである。なお、この慰霊碑の一二九人の中に江釣子の忠霊塔にも重複し記載されている者が一人含まれていた。

(3) 下江釣子の「忠霊塔」について

北上市下江釣子の江釣子神社境内に昭和一八年に造立された忠霊塔がある。この忠霊塔は、高さが台座まで含めて五・四m、横が六・七mで、正面台座の中は納骨堂になっている。横川目の忠霊塔と全く同じ形式でつくられている。台座の左右には西南の役、日支戦争、日露戦争、満州事変、大東亜戦争の順に二三三人の戦没者名が階級順に記されている。台座の裏には、昭和十八年十月建設と記されている。銘文は縦書きで「忠霊塔」とあり、側面には「陸軍大臣東條英機謹書」とある。造立者の名前はないが、『江釣子村史』によれば、「明治十年以来江釣子村の戦没者二百二十三名の英霊をあつめて忠霊塔として祀り（以下省略）」とあることより、旧江釣子村で建立したものである。

戦没者名が記されている台座の左右のプレートには、西南役から大東亜戦争まで所属、階級、氏名が戦役ごとに記載されている。二三三人の内、陸軍が一六五人、海軍が三八人である。二三三人を死没者年代別にみると次のとおりである。

西南の役	一人
日支戦争	二人
日露事変	一〇人
満州事変	一六人
大東亜戦争	二〇四人
計	二三三人

『北上市戦没者及び遺族名簿』と照合すると、昭和一六年までは中国の山西省での戦没者が多い。昭和一七年以降は、ニューギニアのビアク島、フィリピンのルソン島での戦没者が多い。そして昭和一九～二〇年の戦没者が圧倒的に多い。なお、この忠霊塔の二三三人の中に藤根の慰霊碑にも重複し記載されている者が一人含まれていた。

横川目の忠霊塔と同様すぐ側に「五訓之森」の石碑があり、側面には「昭和七年勅諭御下賜五十年記念トシテ建立」「昭和十五年皇紀二千六百年記念事業ニテ改築」「帝国在郷軍人会江釣子軍人会江釣子分会」と記されている。

4 おわりに

今回、遺族会で編集した戦没者名簿と忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑などに刻まれている名前と一部照合してみたが、複数の町村に跨って記載されている戦没者もみられた。また遺族の高齢化や移動により正確な情報を得ることができず忠魂碑、忠霊塔、慰霊碑などに名前があっても、戦没者名簿に漏れていることが多々あることが判明した。また村ごとに出征兵と戦没者数の対比をしようと思ったが、出征兵を把握できる資料が見つからず、今後の研究課題としたい。

参考引用文献

江釣子村　一九七一　『江釣子村史』　江釣子村

北上市遺族会編　一九九五　『北上市戦没者及び遺族名簿―終戦五〇周年記念―』　北上市保健福祉部

大矢邦宣編　一九八九　『和賀町の石造文化財』　和賀町教育委員会

小田嶋恭二　一九九九　「北上の石碑について」『北上市立博物館研究報告第一二号』　北上市立博物館

高橋峯次郎編　一九六七　『藤根郷土史』　高橋忠光

名須川溢男編著　『岩手県の一〇〇年歴史ものがたり』　岩手出版

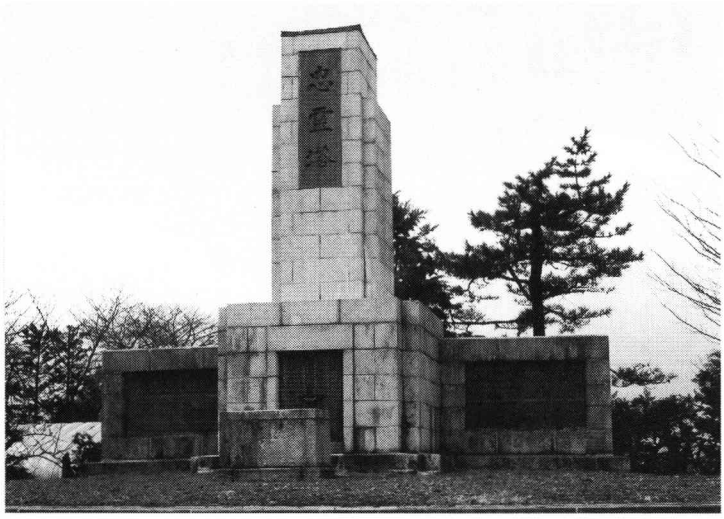
岩手県　一九四九　『昭和二十二年岩手県統計年鑑』

（北上市農林部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇二年四月三〇日受理、二〇〇二年六月二八日審査終了）

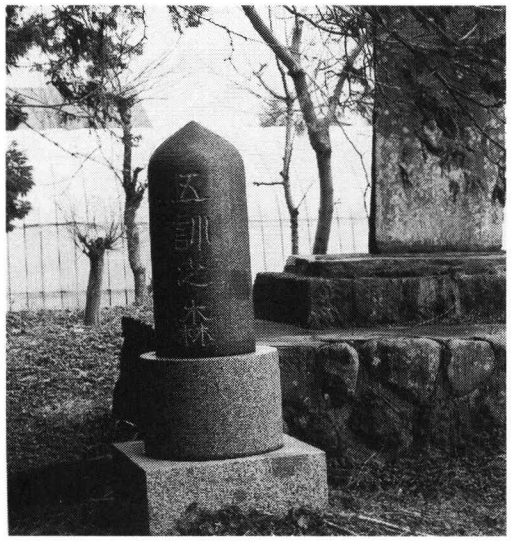
写真１　和賀町横川目の「忠霊塔」

写真２　和賀町藤根の「忠魂碑」と「慰霊碑」



◀写真３　下江釣子の「忠霊塔」 正面

◀写真４　下江釣子の「忠霊塔」 側面



▶写真５　忠霊塔側面にある「五訓の森」